

2023年

12/10日

対面・オンライン
選択できます

第18回 ソーシャルワーク研究所 シンポジウム

ソーシャルワーク専門職が取り組むアセスメントの特徴と支援ゴールの設定
ー「求められる支援」を届ける方法と課題ー

●プログラム（敬称略）

※ 事情により開催方法や内容等が変更となる場合があります。

開催趣旨と進行方法の説明	13:00～13:10
所 長：北 川 清 一（ソーシャルワーク研究所所長、明治学院大学名誉教授） 総合司会：新 保 美 香（明治学院大学教授、ソーシャルワーク研究所相談役）	
第1部 【主 題 の 学 び】	13:10～13:45
＜ 応 援 メ ッ セ ー ジ ＞ 講 師：渡 部 律 子（日本女子大学名誉教授、ソーシャルワーク研究所相談役） 「クライアント（利用者）と対人援助職の双方が『希望』を持ち続けるには」 ※ 事前に実施する参加者アンケートをもとに講師が応援メッセージを届けます。	
司会進行：新 保 美 香	
第2部 【指 定 討 論】	13:55～16:20
＜ 現 場 実 践 者 が 語 る ア セ ス メ ン ト の 取 り 組 み ＞ 発題者1：渡辺ゆりか（草の根ささえあいプロジェクト：代表理事） 「生きづらさを抱える子どもや若者の生活・就労支援の方法と課題 ー本人と企業を繋ぐアセスメントの特徴と支援ゴールー」 発題者2 高山由美子（救世軍世光寮：家庭支援専門相談員主任） 「『子どもの権利』を擁護するために『子どもの声を聴く』方法と課題 ー児童養護施設実践を支えるアセスメントの特徴と支援ゴールー」 発題者3：谷 義 幸（公立神崎総合病院：ソーシャルワーカー） 「退院支援から『一歩前に踏み出す支援』の模索 ーソーシャルワーカーの実践を支えるアセスメントの意義と特徴ー」 発題者4：安達真理子（Human Support Believe：代表） 「ピアグループスーパービジョンで実践力を高めるには ー事例検討会で学ぶアセスメントの意義と特徴ー」 司会進行：川 向 雅 弘（聖隷クリストファー大学教授、ソーシャルワーク研究所相談役）	
第3部 【グループディスカッション】	16:30～17:50
・六つのグループに分かれて「ディスカッション（質疑応答）」を行います。 ・17時20分から約30分間、各ファシリテーターからの「グループディスカッション成果報告」を行います。 ・グループ1～4（対面型）は参加申込み時に希望を伺います。申込み状況によりご希望に沿えない場合があります。 [グループ1] ファシリテーター：新保美香 + 渡辺ゆりか [グループ2] ファシリテーター：沖倉智美（大正大学教授）+ 高山由美子 [グループ3] ファシリテーター：稗田里香（武蔵野大学大学教授）+ 谷義幸 [グループ4] ファシリテーター：丹野真紀子（大妻女子大学教授）+ 安達真理子 [グループ5（オンライン）] ファシリテーター：菅野道生（淑徳大学准教授） [グループ6（オンライン）] ファシリテーター：川向雅弘 司会進行：川 向 雅 弘	
閉会の挨拶（総括）	17:50～18:00

所 長：北 川 清 一

●開催趣旨

2019年12月に中国湖北省の省都・武漢で確認された「最初の感染者」の報告から始まった新型コロナウイルス感染症は、わが国でも多くの人びとが「生活様式」を大きく変えざるを得ない事態をもたらした。その一方で、現在、「ウィズコロナ」「アフターコロナ」を想定した新しい「暮らし」の定着と、それを支える政策的対応の模索が始まっている。

しかし、「社会問題の個人化論」の浸透と相まって、何がしかの「苦しみ」を抱えている人びとに思いを寄せようとし、ない社会的風潮が顕在している。また、今や社会福祉の制度運営におけるメインストリームとなった「包括支援」に内在する課題も明らかになってきた。すなわち、ソーシャルワーク専門職が担う支援過程に見いだせる、個々人の事情に配慮しない画一的支援のゴール設定や、支援の押しつけ（paternalism）が常態化する事態の拡散である。

社会制度は、対象となる事象を「マス（mass）＝かたまり」と捉えてシステム化するため、「対象の対象化」問題を内在しつつ運営せざるを得ない側面をもつ。その事象に該当する当事者は、抱え込んでいる難題を「他人には理解できない個人的事情」による私だけの生活上の問題」と受けとめがちなため、次第に社会の隅に追いやりられ、孤立化することも希でない。当研究所は、かかる事態を「制度の狭間」問題と提起してきた。ソーシャルワーク専門職として、「対象の対象化」から派生する「システムエラー」「ヒューマンエラー」の解消を図り、事態の改善を目指して、「一歩前に踏み出す」「ボトムアップ（bottom-up）型志向」を特徴とする自らの職業の社会的意義について受けとめ直す必要を問いかけてきたのである。

当研究所が創刊に尽力した雑誌『ソーシャルワーク研究』（相川書房）編集委員として1980年から参画された故・久保絃章法政大学教授は、他者の「生の過程」に介在するソーシャルワーク専門職への「エール」の意味を込めて「人びとの生活や存在そのものの『重さ』に打ちのめされ、自らのこだわり（持論）が『色あせる』ように感じる経験をする必要はないか。社会福祉実践に関する学びは、このような経験を自ら克服することから始まるのかもしれない」とし、このことを国家資格の取得者

として真摯に受けとめ、支援過程で「知識の切り売り」に陥らないよう努めるべきとも語られた¹⁾意味を共有してみたい。

併せて、私達は、ソーシャルワーク専門職として理論・技能（art）・倫理（価値）や、自らの「専門性（speciality）」に裏打ちされた支援関係の構築を図る努力をなす際、繰り返して指摘されてきた安直な経験至上主義的思考（経験・勘・骨・直感）の功罪を自己検証する努力が求められる。つまり、①自分の「こだわり」（＝持論（practice theory-in-use））に固執しがちな傾向（bias）を自覚（＝自己覚知）し、他の捉え方と相対化の中で、自身のスタンスを絶えず内省的に点検・検証する意識的作業を続けること。さらに、②利用者が直面している「現実」への分析を欠落させない視点（アセスメント：assessment）に立つ介入方法（＝他者理解）を身体化（performance）でできることである²⁾。

ソーシャルワークを論じる際の「共通基盤（common ground）」が未だに定立をみない実態に鑑み、第18回シンポジウムでは、あらためて、ソーシャルワーク専門職が「実践」と「理論」を繋ぐ「視座」を持ち合わせるべき意味を検討してみたい。いわゆる「かわり難い困難」事例に「対峙できない理由を探す」のではなく、時に後ろ向きになりがちな「拘り」から身をすらし（＝脱構築）、ソーシャルワーク専門職として責務を捉え直しつつ（＝再構築）「前に進む」ために、ソーシャルワークの「実践」と「理論」を繋げる作業の「切り口（viewpoint）」として「アセスメントに取り組む作業に内在する課題」を検証（自己覚知）し、「求められる支援」について再考する機会としてみたい。

注 1) 久保絃章（聞き手：北川清一）「実践と理論をつなぐもの―当事者・現場の人たちとのかかわりから―」『社会福祉研究』第84号、鉄道弘済会、2002年。2時間に及び聞き取りであったが、この「エール」は途中の休憩の際に語られた。

2) 北川清一「児童養護施設のソーシャルワーク実践と権利擁護―実践原則の汎用状況を生成する視座―」北川清一編『社会福祉の未来に繋ぐ大坂イズムの継承―「自主・民主・平和」と人権視点―』ソーシャルワーク研究所、2014年。

●主 催 ソーシャルワーク研究所

●開催方法 「対面型」および「オンライン型」

●開催日時 2023年12月10日（日）13：00～18：00（受付開始12：20）

●場 所 明治学院大学 白金校舎（東京都港区白金台1-2-37）

●参 加 費 5,000円 ●参加対象 テーマに関心があれば、どなたでもご参加いただけます。

●募集定員 100名（対面型：70名、オンライン型：30名。定員になり次第締め切ります。）

●申込方法

- 1) 参加を希望される方は、研究所ホームページの申込みフォームに必要事項を入力し、送信してください。折り返し、申込受付メールを自動返信しますので、受信メールをご確認ください。
- 2) 研究所の銀行口座【みずほ銀行高輪台支店（普）1100462、名義：ソーシャルワーク研究所】に、参加費をお振り込みください。誠に恐れ入りますが、振込手数料はご負担願います。
なお、ご入金後の参加費は返金いたしかねますのでご了承ください。

●開催方法に関するお願い

- 1) 本シンポジウムは、明治学院大学白金校舎（東京都港区）にて「対面型」で開催します。なお、「対面型」での参加がかなわない方は「オンライン型（Zoomミーティング）」でご参加いただけます。参加申込み時に「対面型」「オンライン型」のどちらかを選択していただきます。
- 2) 第1部「主題の学び」では、事前に参加者アンケートを実施します。ご協力ください。

●お申し込み・お問い合わせ先

ソーシャルワーク研究所
〒272-0143 千葉県市川市相之川4-6-3-305
E-mail：swkenkyu@mail.meijigakuin.ac.jp

※お問い合わせはE-mailをご利用ください。

Tel & Fax：047-704-8007
URL：http://www.meijigakuin.ac.jp/~kitagawa/